

論文要旨

地域イノベーション学専攻	地域イノベーション学専攻	氏 名 ふり がな	さかもと ふみこ 坂本 文子	印
学位論文題目 持続可能な地域社会の形成・維持に向けた多文化共生の実態と社会変容の在り方 (The Picture of “Multicultural Coexistence” and the Way Social Transformation for the Formation and Maintenance of Sustainable Local Communities in Japan)				
序論 <p>問題の所在と背景：日本では急速な人口減少期を乗り切るための自律的な地域社会の構築が喫緊の課題となっている。しかし、集合性と共同性の乖離により自治会は「公共性の媒介装置」としての機能を失いつつある。加えて、外国人住民の増加に対し、国は多文化共生の理念を示すが、地域コミュニティ施策と多文化共生施策は乖離したままである。公共圏の一角を成し、「異質性を生きる人々」の象徴とされる外国人児童生徒の教育環境は周縁化しており、社会的効率性を高め、人々の紐帯の形成・維持・回復を期待される社会関係資本は、固有財や集合財としてだけでなく公共財としても重要になっている。以上を踏まえ本論は、社会関係資本を中心に多文化共生の実態を明らかにすることを通して、社会的効率性を高められる持続可能な地域社会の在り方を検討することを目的とする。</p> <p>研究方法と枠組み：日本における地域社会の変容を「外国人住民の増加」と「地域コミュニティの衰退」の二つの側面に分けて捉え、特に、第 1 章で外国人児童生徒教育および、第 2 章で地域コミュニティの形成・維持の実態を明らかにする。さらに、それらの課題をつなぎ止め、解決を図る手段の検討として第 3 章で地域に根差した教育手法と第 4 章で中間支援におけるコーディネーションに着目し、その有効性を検討する。主な調査手法として、聞き取り調査、質問紙調査、アクションリサーチを用いる。</p> <p>第 1 章 外国人児童生徒教育を通してみえる多文化共生の現状</p> <p>地域における人々の紐帯は居住するだけでは自然に生まれない。では公共圏の一角をなす学校教育は社会関係資本を醸成する場となり得るのか。戦後の公立学校への外国人児童生徒受入姿勢は恩恵的なものだった。1980 年代以降、児童生徒が多国籍化し続けてもなおその姿勢は現在まで引き継がれている。全国の就学時案内の調査からは、かれらの教育を受ける権利が十分に保障されていない実態を明らかにした。また、外国人生徒の高校進学率は日本人と比べて低い。高校に進学できた生徒の進学の過程を分析した結果、高校受験のモラルと学業成績のつながりを指摘するインフォーマントはおらず、関係的資本が不安定な環境を補完したことで進学モラルを高めていた。教育を受ける機会の平等は国籍要件によってその権利を奪われているだけでなく、日本の居住地域左右されている。これらの結果は、外国人児童生徒教育において社会関係資本の重要性を示した。</p>				

続紙 有 ☒ 無 ☐